



持続と破綻を分けるものは何か

— 中部班の事例からの考察 —

【 「破綻」とは何か 】

最近になって、「破綻」「賢明」の語の使用に迷うことがある。

今回の湯本さんからの課題には(10月8日付メール)には、次のようにある。
「地域班にお願いしたい課題のひとつは、生物資源の持続的利用と資源枯渇を分けた社会的経済的要因はなにか（「賢明な利用」とその破綻を分かつ条件はなにか）についての概念的な整理です。」

→ここから湯本さんは
生物資源の持続的利用＝「賢明な利用」
資源枯渇＝破綻
という前提をもっていることがわかる。

一方で、本プロジェクトの初発から「日本は生物多様性のホットスポット」であることが指摘され、その生物多様性がなぜ維持されてきたか、という観点も強調されてきた。とすれば、

生物資源の持続的利用＝「賢明な利用」＝生物多様性の維持
資源枯渇＝破綻
という図式を湯本さんが描いていることも確かと思われる。

これが

- 生物資源の持続的利用＝「賢明な利用」＝生物多様性の維持＝人間にとっての幸福
- 資源枯渇＝破綻＝人間にとっての不幸

という相関関係にあれば、「破綻」「賢明」の語に齟齬は生じない。

しかし場合によっては、起きている事実と「破綻」「賢明」の語とに不自然な齟齬が生じることがありうる。たとえば、

○ある種の生物が枯渇することで別の生物を利用した生業体系が新たに構築されたような場合、すなわち

「生物多様性の減衰が却って新たな生業展開を可能にした」

場合には、これを「破綻」と評価するか「賢明な利用」と評価するか。

→ 生物学的には破綻だが、社会経済的にはより「向上」した状態
(これを社会科学的・人文科学的には「破綻」とは表現しにくい)

※生活が「向上」したように見えて、実は人間の気づかぬところで多様性の減衰が別の不幸を惹起していることはありうるが…

○支配権力の強制で地元住民が自然資源から締め出され、

「生物多様性は増大したが、人間が自然利用してきた生活が営めなくなった」

場合、これをどう評価するか。

→ 生物学的には多様性は維持されるが、社会経済的にはより「悪化」
した状態(支配者には都合がいいが、地元住民には不幸)

(これを社会科学的・人文科学的には「賢明」とは表現しにくい)

つまり

人間生活の持続に視点をおくか

生物資源の持続に視点をおくか

で、「破綻」や「賢明」の意味合いも変わってくるのではなかろうか。

では、どのように考えるか？



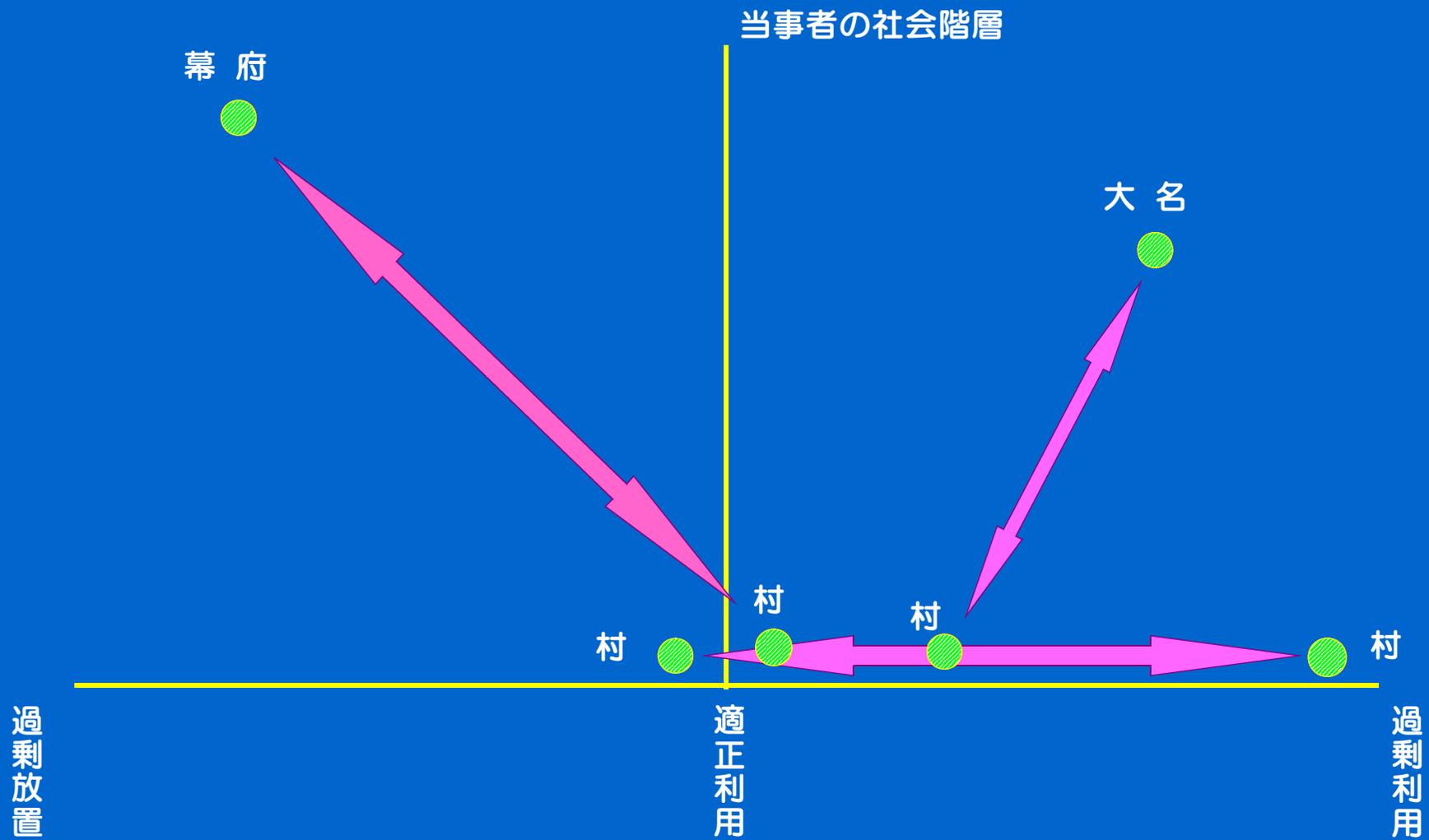
- ▼あくまで自然と生活とが比例関係にあたるような自然資源の甚大な改変事例のみ(例えば森林環境自体の喪失など)を対象として評価するのか、
- ▼「破綻」「賢明」という人文的価値評価の入る用語ではなく、自然史に主軸をおいて、生物多様性自体の減衰または持続という見方にするか、

しかし一方で、人間社会の幸福を視野に入れない純粋な自然史では、本プロジェクトの意味が失われるし、社会に向けての説得力・発信力もなくなる。



- ▼自然・生活両者の「ある種のバランス」のとれた状態からの持続と破綻を問題にするということか。「ある種のバランス」が難しい(価値判断が入る)が…

[資源の利用度と関係当事者の社会階層の関係図]



■山地資源利用を分析する前提＝森林資源の多様性

木	…建築材（構造材・部材）	…資材（屋根材・壁材）
	…木工品	茸類…食料
	…燃材（薪・木炭）	鳥獣…食料
	…薬種（木皮等）	…鷹狩用鷹
	…食料（果実）	…薬種（熊の胆）
	…肥料（枝葉）	…生活資材（皮革）
	…資材（結束材・紙原料等）	魚…食料
草	…肥料	土地…農耕用地（焼畑等）
	…食料（山菜）	

→ それにもとづく生業の多様性＝多職性

〔農業・林業・木工業・薪炭業・狩猟・漁撈・採集…〕

（自給性と商品性を併せ持つ）

■ 持続と破綻を分けるものは何か？

- 「破綻を厭わない動き(欲)」と「持続させようとする動き(抑制)」とのせめぎあいのプロセス(欲と抑制の葛藤)と捉える

「欲」…過剰な利用・過剰な利用抑制・利用のバランスを崩す動き

「抑制」…適度な利用を持続させようとする動き

- 両者の動きを可能にした(あるいは促した)各時代・地域のガバナンスを背景的条件(パラメータ)として加味する

■ 具体的な秋山の事例で見ていくと…

秋山地域の自然環境にとっての「破綻」とは

- ①根本的 → 山からの森林の消失…〈例〉皆伐・はげ山化
- ②部分的 → 特定動植物の消失…〈例〉針葉樹材の伐り尽くし

<①の根本的な破綻に向かう圧力と地域の対応>

- 享保の巢鷹山争論
 - 周辺地域(西・北)からの伐採圧力
 - 幕府主導の大規模伐採計画
- 地元からの訴訟・歎願によって排除
(巢鷹山制度等の利用)
- 18世紀後半～19世紀の気候変化→飢饉(木の実・雑穀共に実らぬ年も)
→一部の集落は廃絶
(「飢饉で滅亡」と言われるが…他集落への統合も?)
人口増に対する資源不足の可能性が高い

<②の部分的環境破壊(地域内)の事例と対応>

- 焼畑の拓き尽くし(大秋山村と矢櫃村が争論) → 双方の妥協で解決
(幕府の権威を利用)
- 針葉樹の枯渇 → 広葉樹の利用へシフト

①の根本的な破綻の問題を整理するには…

破綻させる動き…大規模・産業的資源利用者が主(外部的資本などの投入)
(ソトの者がソトのために利用)

持続させようとする動き…小規模・自家商売的資源利用者(持続が前提)
(ウチの者がウチのために利用)

との対立を軸に整理してみる

根本的破壊…排除
部分的破壊…解決



**森林環境そのものを維持しないと生活できない
地元の者たち(小規模自家商売的資源利用者)による保全**

近代の秋山 … 共有的利用の縮小(山林資源は維持)

- 「当人民ハ衣食住ノ資ノ殆ト全部ハ此ノ共有地ノ所得ニ求ムル」
(長野県下高井郡堺村屋敷共有地実地取調書)
 - 共有地の生活上の重要性を強調
- 「江戸ガバナス」の消滅→ 巢鷹山への伐採圧力？
「荒廃ノ極ニ達スル(部落有林野)」多い(長野県内務部林務課報告書)
 - 焼畑への批判か？過伐の進行か？両方か？
- 明治中期以降、開田が進み、植林地が増加
 - 開田の進行… 焼畑耕作依存度の低下
(共有地を必要とする条件が薄れる)
 - 部落有林野統一事業への障害なくなる
 - 植林地増加… 焼畑跡地への植林
(世帯別の私有地化の必要性高まる)
 - 公有地の私有地化の進行

現代の秋山 ……山地利用の不活性化(山林資源は維持)

○高度成長前…1953(昭和28)年、焼畑耕作の終止 → 植林地の増加

○高度成長後…1960年代から生活様式が激変 (テレビ・洗濯機・炊飯器等、燃料革命)

生業

稲作の本格的展開

(1975年に開田面積ピーク。1985年からは放棄地増加)

観光業の伸び

出稼ぎの増加

集落遠隔地での薪炭採取終止

木工業、観光的価値あるものに限定

○現在…世帯の収入や仕事=年金・自営業 (民宿・商店)・給料とり
山地利用の不活性化 → 環境の維持 (積極的改変なし)

《但しナラ枯れの放置・拡大》

○林業の低迷 (植林地はそのまま)

○細々と木工・自家用燃材採り、但し自家商売用の茸・山菜採りは盛ん

○ナラ枯れの放置・拡大

秋山の近現代には

森林の皆伐圧力など壊滅的な環境改変の動きは見られない



主生業レベルでは山地利用は不活性化

しかしマイナーサブシステムの多様性に基づく資源利用を継続

→ 山地環境保全の必要（山あってこそその生活）は継続

[近現代秋山の土地利用・所有変遷図]



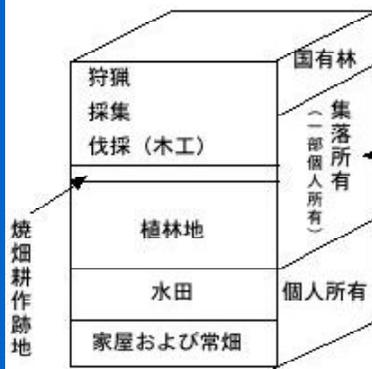
江戸時代から明治初期



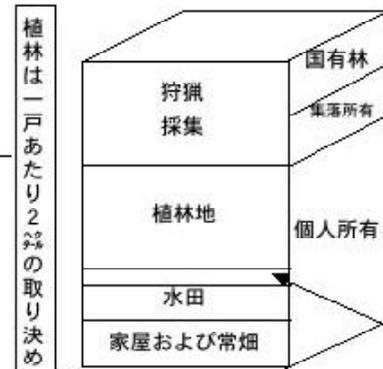
明治初期から戦後



昭和30~40年代

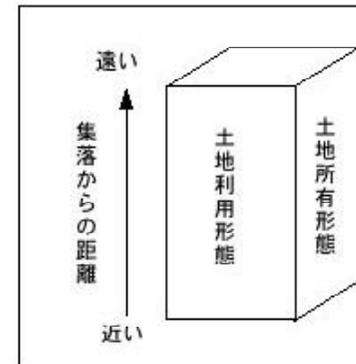


昭和50年頃



昭和末期から現在

植林は
一戸あたり
2畝の
取り決め



(井上卓哉氏作図)

A photograph of a mountain landscape. The scene shows a road winding through a valley, with a waterfall cascading down a rocky slope. The mountains are partially covered in snow, and the sky is overcast. The text is overlaid on the image.

持続と破綻を分けるものは何か

— 中部班の事例からの考察 —

■類似の分析例 — 手賀沼の事例

手賀沼…10年連続の湖沼汚染度ナンバーワン

近現代に至って環境の大改変＝現代に至っての「破綻」

- 従来は周囲の住宅開発などの要因で説明 → 不十分
- 沼とともに生活してきた現地の人々の無関心化 → 環境の大改変（前代には水田化も）
- 沼と密着した生活文化体系の喪失 → 沼の汚染を座視 → 極度の汚染へ



やはり地元民が「維持しよう」「残そう」とするかどうかが重要